

## 伝為忠筆『金葉和歌集』



天治元年(1124)から数年の間に、初度本・二度本・三奏本と数度の改訂を経て成立した五番目の勅撰和歌集『金葉和歌集』には、その改訂の跡を示すように様々な段階の伝本が存在する。最も流布したのは二度本であるが、その二度本もまた、歌数や排列等が様々に異なる伝本群が残されており、以下のように大別される(括弧内には、その分類の代表的伝本の取歌数を示す。伝橋本公夏筆本・伝二条為明等筆本は本学所蔵)。

- 初撰本 (伝橋本公夏筆本は和歌 746 首 + 連歌 19 首 = 765 首)
- 再撰本
  - 流布本系 (正保版二十一代集本は和歌 693 首 + 連歌 19 首 = 712 首)
  - 中間本系
  - 精撰本系 (伝二条為明筆本は和歌 648 首 + 連歌 17 首 = 665 首)

初撰本から再撰本へと精撰が進み、再撰本の中でも、流布本系から精撰本系へと移行するに従って取載する和歌が絞込まれていく様子が窺えよう。

当該資料は再撰本のうち精撰本系に分類され、総歌

数は 671 首(和歌 654 首 + 連歌 17 首)。「袋草紙」(藤原清輔著、1157 ~ 59 年頃成立)が書き留める「金葉集和歌六百五十四首。此外連歌十六首。但流布本是也。」にはほぼ一致する歌数であり、興味深い。精撰本の最終稿本系の伝本とされるのは伝二条為明等筆本(1-14)だが、その一歩手前の段階を示すと考えられている。

函架番号 I-15。南北朝写。列帖装。1 帖。縦 16.3cm × 横 12.9cm。楮紙打紙(楮の強い斐楮混澁か)。金茶菱繫地牡丹唐草文金欄表紙。見返しには銀箔を散らす。外題はなく、内題「金葉和歌集」。116 丁(墨付 113 丁)。1 面 10 行。1 首 1 行書。「正宗敦夫文庫」の方形朱印。末尾に「此集者権中納言為忠卿/真跡也一覽之次記此/特進並相通村(花押)の識語を有し、南北朝期の公卿・二条為忠(1310 ~ 1373、為世の孫)の書写とされる。識語の通りならば、中院通村(1588 ~ 1653)が正二位権大納言であった寛永 8 ~ 19 年(1631 ~ 42)の時期の手沢本かと考えられる。